蛇苺

山本道子

新潮社

蛇苺

山本道子

新潮社

蛇苺（へびいちご）　定価一〇〇〇円

昭和六十一年二月十五日印刷
昭和六十一年二月二十日発行

著者　山本道子（やまもとみちこ）
発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一一番地
電話　東京（〇三）五二六一一一（業務）
東京（〇三）五二六一一一（編集）
振替　東京　四-八〇八　〒一六二

印刷　二光印刷株式会社
製本　大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Michiko Yamamoto, Printed in Japan. 1986

ISBN4-10-323405-9　C0093

蛇

苺

装画　池田滿寿夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

早朝、庭に面したガラス戸のカーテンを開けた鮎子は、ベランダに捨てられている猫の屍骸を見た。それはすぐ鮎子の足もとにあった。鮎子は、ガラス戸に手をかけたまま、息を呑んで立ちつくした。見たとたん屍骸とわかったのは、猫の横たわっている恰好が、やはり生きものの姿とはどこか違っていたからだった。

黒に白いぶちのある猫は野良猫であったが、このところ鮎子のところに毎日餌をもらいに来るようになっていた。鮎子は、自分でも猫好きといえるほうではないので、この猫が、そのうち馴れきって、家の中にまで入りこんで来るのではないかと、餌を与えながらも、いつもかすかな不安につきまとわれていた。餌を催促して、いつまでもベランダに座りこんでいる猫を見たときとか、鮎子の顔をしっかりと見あげて、息の長い哀れっぽい声で啼く猫から、眼を放せないときな

どに、その不安は更に強いものになるのだった。
この猫は誰かひとの手で殺されて、ここへ捨て置かれたにちがいない、というのが鮎子の直感だった。真黒の毛でおおわれた猫の頭部は、不自然に仰向きになって、躰はねじ曲げたように、四肢をそろえて横たわっている。
誰かひとの手で殺されたという直感は、これが鷹彦の仕業だとは考えたくないと思っている自分自身を、疎ましい思いで傍に見ているということだった。
あの黒い猫はまるで鷹彦みたいだ、と彼に面とむかっていったのは、つい先日であった。あんなふうに一日一日とわたしに懐いてみせて、いつのまにかうちの中まで入って来るの。追っ払いたいと思っても、あんなふうに、わたしの顔色をうかがいながら、一歩一歩抜き足差し足でここへ入って来るの。わたしの側に来て、わたしに抱かれようとする……鷹彦、あなたは、あの黒い猫とそっくりだわ。
そして猫は、鷹彦に殺されて、ベランダに投げ込まれた。鮎子は、唇を噛みしめて猫の屍骸を凝視めていた。わたしがこうして哀れな猫から眼を放せないでいるのを、鷹彦が雑木林のどこかの小暗いあたりから、じっと見ているのだ――。
猫を殺したのは、鷹彦の挑戦と考えていいのか。それとも彼がはっきりした結論を取りだして見せたということか。どっちにしても、このようなことをしでかしてしまったのは、彼の狂った行為を見せつけられたということだった。

鮎子は、猫の屍骸をそのままにして、二階の寝室へもどった。二階の窓からは、どんなに身を乗りだして覗きこんでも階下のベランダは見えない。深い庇に隠れていて、小藪のような樹木の繁りが窓辺までも迫っている。

鷹彦がここを出て行ってから、庭内の雑木林で夜明けまで過したことはわかっている。彼が、草むらで犬ころのようにまるくなって睡ったとしても、鮎子はべつに驚いたりしない。あの子は、これまでも何度もそんなことをしている。それも昌樹が生きていたときから、二人の少年は、夏休みをこの山荘で過すとき、突然野放しにされた犬のように雑木林の繁みに隠れて、鮎子が騒ぎたてるのを尻眼に、野宿をするのは、いつものことであった。

昌樹が国道十七号線の高崎の手前で事故に巻きこまれて死亡したのは、大学に入学した直後だった。彼が浪人中に自動車の免許を得て、父親の乗用車を乗り廻しはじめたのは、両親の期待を裏切ることなく、国立大学の文科Ⅱ類に合格してからであった。夫の幹雄も昌樹の進学を世間並みの父親らしく祝福したのであったが、鮎子は、その感情の動きのなかに、息子に対する父親としての気構えを、その時点で同時にすっぽりとり落したところがあったのではないかと、後になって思い返すのである。それは鮎子自身の痛みでもあった。

昌樹は、勉強だけはよくするこどもで、受験のための養成機関のような校風で一般に知られて

いる有名私立校で六年を過した。
夫婦は、昌樹がいわゆる現役で合格できなかったのを、むしろ息子のためによかったのではないかと思ったのであった。出来のいい一人息子にも親としての不満や危惧はつきないのは当然で昌樹の将来が挫折とは無縁の躓きのないものとは、とうてい考えられないことであった。
昌樹はそうした両親の親心のもとで、気楽に浪人生活の一年を過したといえる。そして、一年後に目的を達成したとき、幹雄の息子に対する無関心を装った放任的な態度に倣って、鮎子自身も、世間的にいえばそれまでの過保護とさえいえる母親の心情を脱ぎ捨てなければいけないと思ったのであった。
息子に対する夫婦の覚悟をさらにたすけていたのは、二ヵ月後に幹雄のカナダへの転勤をひかえていたという事情であった。銀行勤務の幹雄の外地勤めは今回が二回目だった。夫婦は、小学生の昌樹を連れて二年間ニューヨークで過したが、今回はヴァンクーバーの支店長の椅子が待っていた。大学生になった昌樹をひとり残して、夫婦は三年から五年の外地暮しをすることについて、これといって特別の心がまえも必要としていなかった。
しかし昌樹は、彼にとって急にものわかりのよくなった両親が飛び立つ前に、自から姿を消してしまったのだった。
彼が親の眼のとどかない自由の生活をどれだけ希んでいたか。鮎子は週に一度の家政婦との契約も考えていた。家中の掃除などとても昌樹にはまかせられない。それに彼自身自炊をするつも

りになっているが、果してどこまでやれるか怪しいものだった。そんな母親の心配を昌樹はすこしも真面目に受けとめようとしないのだった。だいじょうぶだよ、タカヒコにやらせるよ、あいつはいつも家でやらされてるから、台所仕事は馴れてるんだ。もしかしたら鷹彦がここへ住みつくかもしれない。鮎子はそれについて昌樹に問い質さずに黙って聞き流したのを、昌樹の死後いつまでもこだわっていた。青木くんにそんなことができるかしら。鮎子は昌樹のことばを軽くあしらった。あいつ、意外とマメなところがあるんだ——。

青木鷹彦は昌樹と同じサッカークラブで彼の一年後輩だった。鮎子が昌樹の親友として鷹彦を識ったのは彼らが中学生のときであった。そして昌樹が大学に合格した年に、鷹彦も私立大学に進学した。

大破した運転席で全身を打って即死した昌樹の横で、右足に重傷を負った鷹彦は危うく救助された。

幹雄は、息子の葬儀をすませてから、予定どおり赴任地に飛び立って行った。そして鮎子は昌樹の位牌と一緒にあとにのこった。夫と同行するために完了していた渡航のための手続きはすべて虚しいものになったのだった。

昌樹の死は、いつまでも醒めない悪夢だった。そしていつか悪夢の醒めるときがやって来るその日のために、昌樹との対面を用意しておかねばならないのだった。その日のために、そのときのために、鮎子は自分たちの家を空けるわけにはゆかないのであった。

幹雄は、鮎子の鎖された表情やことばから背をむけるように発って行った。彼には子を失くした母性の錯乱が恐怖であり同時に疎ましかった。息子を失くした痛恨に打ちのめされている彼にとって、妻の変容は、彼自身のものでもあった。しかし夫婦はひとつの不幸をひとつのものとして、両側から手を差しのべることができなかった。夫も妻もそれぞれが不幸を抱きかかえながら時間は二分され、不幸はふたつに倍増されたのであった。

思えば、それは奇態なことであった。夫婦は、それまで一人息子の昌樹を家に置き去りにする計画について、生いきと協議を重ね、結婚以来二十年目に巡って来た夫婦水入らずの、異国での生活を、充分に新鮮な気持で受けとめていた。それが息子との死別と同時に、魔女の手によるひと振りの鞭に打たれでもしたように、わずかな余烟(よえん)もなしに消え果てた。それは夫婦水入らずなどというたわいのない夢想にむけられた現実の仕打ちとなって、夫婦の胸を串刺しにしたのだった。

鮎子は、二階の窓から庭の繁みに眼をこらした。鷹彦の白いシャツが木の間隠れに動いている。鮎子はこのところ急に衰えはじめた視力が、まるで自分自身を不意打ちにあわせるように、外界を違ったかたちに見せてしまうのを知っていた。外界へのそうした疑惑や思いこみは、昌樹の死を境いに、鮎子自身の肉体に生じた新らたな約束ごととして、彼女は自然な気持で意識すること

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ができるのだった。
鷹彦の白いシャツは、繁みの中の野薔薇に見える。そしてつい先頃のことであるが、鷹彦の着ていた真赤なシャツは、鮎子の視界に彼岸花となって咲いたのである。
その日鮎子は、台所の生塵芥を埋めるための穴を、鷹彦に掘らせた。塵芥処理用の穴はひと夏に二、三箇所は必要だった。昌樹の生前、それはいつも彼の仕事であった。
昌樹は、繁みのなかの目立たない場所に、ちいさくて充分に深い穴を手際よく掘った。
鷹彦も昌樹のやりかたを知っていた。彼は、鮎子に頼まれて、スコップを担いで繁みにもぐりこんだ。そのときの鷹彦の彼岸花のような赤いシャツは、鮎子の視力を、ほとんど絶望的なものに封じこめた。
鷹彦と昌樹の見分けがつかなくなるとき、鮎子は、自分の視力が極度に衰退することを知っていた。そして、色彩のはっきりした花の姿に変えてしまうその動く対象を、昌樹とも鷹彦ともいえない少年の精霊にちがいないと思うのだった。
鷹彦が彼岸花になったその辺りに、白い野薔薇を見とどけると、鮎子は息を呑む思いで階下におりた。やはりベランダの猫の屍骸はなくなっている。鷹彦は殺した猫を埋めているのだ。彼は塵芥の穴にそれを放りこんで土を被せている——。その辺りを詳細に見届けることのできない鮎子の視力は、野薔薇の白い花びらと黄色い花粉の匂いまで知るのである。
「どうしてあの猫を殺してしまったの」

鮎子は、鷹彦に問いかけた。しかしそのことばは、彼女の呟きほどの声量にしかならず、繁みの中の鷹彦の耳にはとうていとどかないのだった。

雨晒しですっかりささくれ立っている木製のベランダに、裸足のまましゃがみこんでいると、ペンキの斑(まだら)に剝げた手摺りの外側から、冷びえとした空気がじんわり押し寄せてくる気配がある。

シャベルを担いだ鷹彦は、雑木の枝を掻き分けて姿を見せると、鮎子に真直ぐ近づいて来た。鮎子は、彼のその姿をまるで両眼を閉じて瞼の裏で捉えるように見守った。鷹彦は、ちょうど濃い霧の中を一歩一歩、おもむろに近づいて来るように見える。その半ばぼやけてしまった彼の全身像が、鮎子の眼前で、にわかにはっきりするその瞬間を彼女は心安らかにむかえることができない。その瞬間が怖ろしい、といってもいい。鷹彦は、白い野薔薇だったが昌樹ではない。鮎子は口の中で呪文のように唱えながら、ベランダすれすれに見える鷹彦の頭髪を、薄眼で見おろすのである。鷹彦は、昌樹のように、いや昌樹の姿になって、シャベルなど担いで、こんなふうに母親を見あげたりする——。鮎子のちいさな混乱は、いつもこうして彼女自身に塗りつけられる粘土のように、わずかずつ上塗りされていくのである。

「どうしてあの猫を殺したの」

鷹彦は、シャベルを肩から振り落すようにして、足もとの土に突き立てた。

「殺したのはぼくじゃない」

彼のぶっきら棒な口調は、いつものことではあるが、鮎子を耐えがたい思いにさせる。昌樹と鷹彦の声と話しかたは、聞き分けがたいほどよく似ている。彼らは鮎子が知るかぎり最小限の会話しかかわさない。二人の少年がセンテンスを連らねて話しあっているのを鮎子は聞いたことがなかった。昌樹がある日突然のように変声期をむかえたとき、わが子ながらその少年の口から出る短いことばを、鮎子はいつも、腹の底まで呑みこんでしまいたいような、甘い思いに捉われたのであった。

変声期をくぐり抜けた二人の少年は、その頃から、日常に交すことばがまるで彼らだけの暗号のようになった。鮎子には、彼らがごく身近かでなにごとか話しあっていたにしても、その半分も理解できなかった。彼らはことばを持たない同志のように、手振りとか、視線とか、極めて低い声を交しあうだけで、充分に意志が通じあうのだと、その頃から鮎子は納得するようになっていた。

猫の屍骸をベランダに置いたのは鷹彦しかいない。鮎子は、鷹彦の頭髪に枯れ葉がかかっているのを見ながらいった。

「ぼくが置いた」

「殺したのも、鷹彦でしょう」

「ちがう」

まるで悪さを叱責される幼児のように、鷹彦はかたくなに首を振った。

「猫はどこで死んだの」
鷹彦は、自分の肩越しに後方を指差した。
「どうして死んだの」
「知りませんよ」
彼は、会話のやりとりに嫌気がさしたというように、投げ遣りに応えた。
「いつかマサキがあいつに拷問した。近所の別荘の飼猫だった、仔猫の頃からマサキは追い廻していた、たぶん今年置き去りにされたんだ、ぼくが見かけたときは死にかけていた」
「昌樹がいじめてたのね、鷹彦も一緒にでしょう、猫はずっと病気だったといいたいのね……猫を殺しても罪にはならない。昌樹はあの猫を可愛がっていたわ」
「嫌っていましたよ」
「いいえ、よく抱いて撫でてやってたわ」
「いじめるのがたのしみだった」
「猫は昌樹がいなくなってからも、今日まで生きていたわ」
「虫の息だった」
「そうでもなかったわ、毎日のように、ミルクを飲みにここへ来てたわ」
「飲むことしかできなかった……病気だった」
鷹彦は、鮎子との会話を振り切るように、ベランダにあがって来ると、スニーカーを脱いで室

内に入った。
彼が自分の持ちものをまとめるために、屋根裏の小暗い三角天井の部屋へあがって行くのを、鮎子は無言で振り返った。まるで昌樹がそうしていたのと同じように、鷹彦は、スエーターを腰に巻きつけて、両袖を前で結んでいた。その薄汚れたスエーターが、鮎子には昌樹の亡霊に見えた。そのような錯覚に捉われるとき、鮎子はことさら、息子とはまったく別のこの少年を、もっとも身近かなひとりのおとことして扱った。
そして、夫や息子と世間並みにひとつの家族を構成していた頃のことがひと昔前の夢のように思われた。
鷹彦の歩きまわる音を、鮎子は胸が締めつけられる思いで聞いていた。彼が床を鳴らす音など、その動作のひとつひとつは、鮎子の想像のなかで湧きあがるような昌樹への思いを呼びさました。
昌樹はいつも、自室としていた屋根裏の床を、ちょうどひとつのリズムに執着する楽器の奏者のように鳴らしつづけていた。それは鮎子を脅かす種類の鈍い音であった。音というより、あれは響きといったほうがいいだろう。床のきしむ音は、とくに鷹彦と二人きりでいるときに、耳障りな音楽のように絶え間のないものであった。それについて、鮎子は母親らしく苦言をのべたことがある。あの部屋の床は……、と昌樹はいった。あれは半分腐っているか、この小屋を建てた大工がなにかの仕掛をしたかだ、ぼくたちがあんな狭い場所を歩きまわると思ってるの、ママ。そうだった。昌樹の屋根裏の床は、彼が歩きまわらなくても、静かに椅子に腰かけているときで

も、ただひとがいるというだけでみしみしと鳴っていた。
「鷹彦、明け方のこと憤ってるの」
ナップザックを持っておりて来た鷹彦は、鮎子の声には振り返りもせず、ベランダに脱いであるスニーカーを取るために、彼女の前を横切った。
「わたしについて……とやかく考えないでほしいの、昌樹の母親だってことも忘れてくれればいいの」
「もうぼくを呼びつけないでください」
鷹彦は、玄関にかがみこんで靴のひもを結んだ。
鮎子は椅子から立ちあがった。玄関の外まで彼を送り出そうと思った。
「まだ朝ごはんも食べてないわ、だいじょうぶ」
「駅前になにかあるから」
彼は裏庭に廻り、自転車を押して門の外へ出た。「駅まで貸してください、あの店にあずけておきます」
昌樹の自転車は、彼がいなくなってからは、鷹彦が使っている。毎夏、鷹彦は自転車屋からサイクリング車を借り出して、二人はどこへ行くにも一緒だった。
家の前の山路は、二十年も前からまったく変らない泥道で、雨が降るとすぐにぬかるんでしまう。乾いているときも自動車のタイヤの跡が帯状に深くえぐれている。盛夏の頃、道端の繁みに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c